



Title	織物以前のこと : オセアニアの衣文化
Author(s)	福本, 繁樹
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 114-115
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56374">https://doi.org/10.18910/56374</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 織物以前のこと

### — オセアニアの衣文化 —

福本繁樹／大阪芸術大学

パネル展示は研究発表と連動させたもので、オセアニアの衣文化の資料を展示した。これまでのパネル展示は、学会員による実験的、創作的なデザイン作品がほとんどで、それが「意匠学会作品賞」の銓衡対象とされているので、今回のような資料展示企画は異質で、はたして学会の定める趣旨に添ったものか不明だが、学会のHPにもパネル展示企画の趣旨文がみあたらなかったもので、勝手な方法ながら展示に参加した。デザイン学会の発表の場は論文発表と作品発表に限られているようだが、研究発表が映像や言葉のみに限定されるのではなく、研究発表と展示を連動させるのもいいのではないかと、また、近代を中心にデザインを考えるばかりでなく、古代や諸民族の例まで視野をひろげて、デザイン文化を俯瞰することも必要ではないかと考える。

「織物以前の豊かな布・装飾文化」を認識することは、デザイン／意匠の源流を訪ね、その発生や原点、ひいてはデザインの本質を考察するうえで有効かつ重要な手段となるだろう。まず認識しなければならないのは、人類が装飾を施した最初のもは、自らの身体であり、古くネアンデルタール人の時代までさかのぼることである。装飾行為やデザインの意味を、その発生から考えることも必要だとおもうが、古い時代の資料がすくなく、研究対象とすることも困難であり、この視点でのデザイン研究が十分なされてきたとはおもえない。しかし近年の考古学や民族学の進展はめざましく、また両者をあわせた民族考古学の有効性も強調されるようになった。デザインについてもこのような立場で考察するこ

とも必要だろう。

展示ではスペースの許される範囲で、オセアニアの衣文化に関する収集資料を17点(1973-90年現地収集)構成した。タイトルは研究発表の「織物以前のこと — 織物以前の豊かな布・装飾文化」に対して、展示では「織物以前のこと — オセアニアの衣文化」とした。少しでも「豊かな布・装飾文化」の「豊かさ」を紹介したいと展示したのだが、もちろんそれらはオセアニアの衣文化のほんの一例でしかない。

展示品は、衣の始源から織物へと連続させるように、紐衣 (ligature) やペニスケースから、タバ (樹皮布)、編布、そしてオセアニアの東の最果てに伝えられた織物などを展示した。

紐衣は、数千個の貝製ビーズを編んだ腰帯 (ソロモン諸島) をはじめ、巻貝製ビーズ編み (パプアニューギニア東部海岸)、凹刻顔料象嵌樹皮製 (パプアニューギニア中央高地)、編み細工、(パプアニューギニア中央高地)、繊維とビーズ製 (トロブリアンド島)、ステッチ装飾の籐製 (ソロモン諸島マライタ島北部) などの帯である。またヒョウタン製、編み細工、ココヤシ繊維製のペニスケース (パプアニューギニア)、棒締め染め編布のペニスサック (ヴァヌアツ、ペンテコスト島南部) も展示した。単なる帯やサックといったシンプルな形状ではあるが、そこには念入りの細工や装飾が多様な方法で施されている。

オセアニアには機織り文化がごく限られた地域にしか伝えられなかった。織布は、インドネシア諸島からミクロネシアの南部をかす

めて、メラネシアの一部の島に伝わった。その東の果てのサンタクルズ島では、私の1973年のフィールドワーク当時、世襲制によって3人の男が機織りの技術を伝えるのみだった。そのとき収集した織布の儀礼用褌を展示した。浮き織りによって白と黒の樹皮繊維を繊細な紋様が織りだし、パンダヌスの葉を折り込んで装飾としている。

機織りが伝えられなかったこともあり、オセアニアには各地に発達した多彩なタパ（樹皮布）が今日に伝えられている。パプアニューギニア東部ワニゲラ地区のタパの褌や腰巻には、黒の輪郭と赤の色差しによって、氏族に伝えられた神話にまつわる模様が施されている。布の品質は素朴なものだが、その紋様は魅力にあふれ、複雑多様をきわめている。紋様は氏族の由来や名誉をもの語り、彼らが布で装う意義は布でまとうことよりも紋様を身につけることにある。そのあり方はボディペインティングや文身に連動し、自らのボディ（皮膚）にほどこされた模様が、「第二の皮膚」とされる布へと移行していった過程を示唆するようだ。また型紙を繰り返した精緻な紋様のフィジーのタパも展示した。

大小の編布（ヴァヌアツ、ペンテコスト島中部）も展示した。大きい方は長さ約5メートルで、多様な編組織が認められ、全体にダイナミックな模様が染め抜かれている。今日の布やテキスタイルは織布中心で、編布自体がめずらしいのだが、編布に防染技法により染色模様が染められている例は世界でもきわめてめずらしい。

防染による染色模様は、織布にしか見いだせず、織布が開発される以前の布文化に、防染技法はないというのが世界の「常識」なのだろう。百科事典や専門書には、オセアニアには防染技法や絞り染めはないと、誤って明記されている。わたしはこの珍しい棒締め染

めパンダヌス布を現地に1973年以来3度調査したが、当時だれもこの布について調査したものはいなかった。

棒締め染めパンダヌス布は、原形は衣料や敷布、寝具にあったのだろうが、世界にめずらしい貨幣（mat money）でもある。展示では座興にクイズ「QUESTION！これは何に用いられるものでしょうか？」として、①たいへん意外なものです、②今日だれでも日常的に用いるものです、③あなたのポケットにたぶん入っているものと同じ機能のものです、と三つのヒントを加えた。以前の大学講義でも試みたクイズだが、一人の正解者もいなかったので、改めて実施したものである。

現代はパソコンによるデザインと、機械生産の時代となった。しかしコンピュータや機械は二進法が可能とするものである。機械の元となった織機はタテとヨコの糸のみに限定し、経糸を上下2群に分けて緯糸を通すだけの装置である。またコンピュータの元となったジャカードは紋紙（孔あきカード）の孔の有無を読む装置である。コンピュータや機械の威力はすごいが、その二進法による制約や不自由さ、限界が意外と問題とされていないのではないか。織物以前の布や装飾文化は、制約や不自由さにとらわれない、奔放なデザイン世界をみせてくれる。

